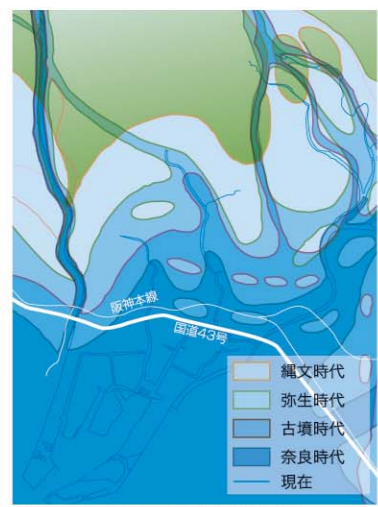


### 川と海が育んだまち

現在の尼崎市は、東は猪名川と、その下流の神崎川、西は武庫川に挟まれた平野にあります。約6000年前、その大半は海で、今の阪急神戸線付近が海岸線だったと考えられています。やがて、潮の流れや川の運んだ土砂がたい積して陸地は南へ広がっていきました。人が住み始めるのは2千数百年ほど前に始まる弥生時代。その後、集落ができて



て農耕生活が営まれ、4～6世紀には尼崎北部に多くの古墳が築かれました。海辺にも人々が暮らし、古くから港もつくられました。『万葉集』などによると、猪名川の河口付近は猪名湊と呼ばれ、白砂青松の景観が広がっていたといえます。

### 港町のにぎわい

延暦4年(785)、淀川と神崎川をつなぐ水路が開削されると、神崎川河口にあった河尻の泊<尼崎>が、京と瀬戸内・西国を結ぶ航路の重要な港になります。大輪田の泊<神戸>などととも五泊として知られ、平安時代末期には「天下第一」と称されるほどにぎわいました。また、中国船も来港し、多くの物資がもたらされました。一帯は流通の中心地となり、港町として大いに栄えます。

川沿いに寺社や貴族が所有する荘園が拓かれたり、砂州が陸地化して「長洲」や「大物」、さらに南に「尼崎」の地ができたりしたのも、この頃です。鎌倉時代には、東大寺を再建した僧・重源が河尻の泊一帯を改修。大物や尼崎は、都の寺社建築に必要な木材を中継する港の役割も果たしました。



## 海へ広がるまち 花咲く水辺の文化

### 大坂の西の守り、尼崎城

中世の尼崎は、港の繁栄を背景に、大覚寺や本興寺を中心とした日本有数の港湾都市として発展。南北朝～戦国時代には、たびたび戦に巻き込まれ、織田信長などにまちが焼き払われたこともありましたが、



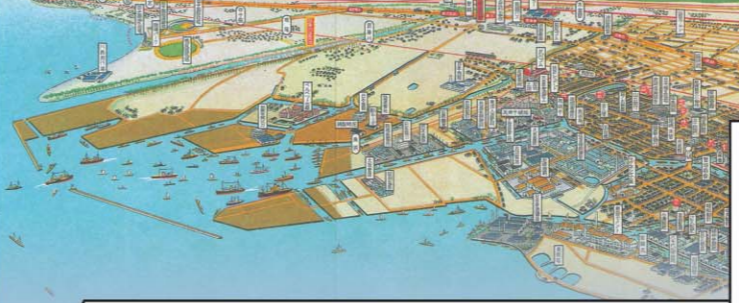
江戸時代になると、西国支配の拠点とされた大坂に近いことから、尼崎は徳川幕府に重視されます。元和3年(1617)に幕府の命令を受けた譜代大名の戸田氏鉄は、旧尼崎城を廃して新しい城の築造に着手。四層の天守がある本格的な城をつくりました。別名、琴浦城とも呼ばれた尼崎城は複数の内堀を持ち、大物川と庄下川を外堀としていたため、

沖から見ると海に浮かんでいるように見えたといえます。城の西には、中世以来の尼崎町や城地にあった寺などが集められて「寺町」が形成されました。その南には侍屋敷や「宮町」、「中在家町」が、さらに城の南の島には「築地町」が建設されるなどして、城下町の姿が整っていきました。中在家町には漁業関係者が多く集まり、漁業は城下の主要な産業の一つとなりました。尼崎はもとより、京・大坂

向けの取り扱いも多く、今井船と呼ばれる小型の急行便が鮮魚を神崎川から淀川を経て都へ運搬しました。尼崎ではこうした船の他にも大坂や西宮、兵庫などとの間を往復し、米や木材、酒樽用の菰、綿、菜種などを運ぶ船も多数、行き交っていました。



尼崎城は私の自信作。



### 湾岸に進出した近代産業

明治維新後、尼崎でも近代化が進んでいきます。明治7年(1874)、大阪～神戸間に鉄道が開通し、尼崎にも神崎停車場ができました。以降、尼崎～伊丹間の川辺馬車鉄道(1891年)や阪神電鉄の開業(1905年)、阪急電鉄神戸本線の開通(1920年)によって交通網が充実します。

鉄道の発達や大阪港の整備が進んだことにより、江戸時代末期に最盛期を迎えた中在家町の魚問屋は次第に衰退していきます。また、新田で作られていた尼崎名産の尼芋は明治時代後期に最盛期を迎えましたが、昭和9年(1934)の室戸台風をさかいに、ほとんど栽培されなくなりました。明治時代前期には醤油やマッチなどの製造が主であった産業は、中期から近代工業へと変貌します。その始まりとなったのは明治22年(1889)設立の尼崎紡績で、左門殿川と大物川の間約3万km<sup>2</sup>の敷地にレンガ造り2階建ての近代工場が建てられました。その後、明治40年代には旭硝子や日本リーパブラザーズ石鹼工場も設立され、こうした会社の中には、敷地内に水路や船だまりをつくって独自に港湾施設を整備するものもありました。



尼崎の臨海地域は、工場用地として注目を集めます。大正時代には財閥系の重化学工業の進出が増加。工業地帯が形成されるに従って、港を整備する必要性が高まりました。昭和4年(1929)、浅野総一郎らによって設立された尼崎築港株式会社はこうした状況を背景として、尼崎市や大庄村の海岸を埋め立てる本格的な開発を開始。やがて、1万トン級の船が直接接岸できる工業港が誕生しました。これにより、鉄鋼業の立地が進み、また、当時、日本最大級の火力発電所も建設されて、尼崎は第二次世界大戦前には日本屈指の重化学工業都市となりました。南部の工業地帯には昭和17年(1942)までに中堀運河や北堀運河、西堀運河がつけられました。

## 臨海工業都市の発展と水害へのそなえ

### 戦災からの復興と課題



第二次世界大戦では尼崎も大きな被害を受けましたが、終戦後まもなく商店街から復興は始まります。一時的に落ち込んだ工業生産も、高度

経済成長期を迎えた昭和35年頃から鉄鋼・金属・機械・化学が急速に生産を伸ばし、尼崎は復活していきました。一方、重化学工業が発展した戦前から工業用水の汲み上げによる地盤沈下が著しく進み、昭和30年代初頭には沈下量がピークを迎えました。こうして、ゼロメートル地帯といわれる低地が市域の約40%以上となっていったのです。昭和25年(1950)のジェーン台風では、臨海地域だけでなく市域の広範囲が高潮によって浸水し、大きな被害がでました。既存の堤防は多くの場所で決壊したため、新たな防潮堤の建設と地盤沈下対策が必要になりました。

### ゼロメートル地帯を守る

新しい「開門式防潮堤」は、神崎川堤防と武庫川堤防の下流端を12.4kmの防潮堤で結んで尼崎の東南西を囲み、船の出入りのために開門を設置するもので、昭和26年(1951)に着工しました。昭和29年(1954)、第1開門が完成し、昭和31年3月までに防潮堤工事が完了。昭和40年(1965)には船の増加に伴って第2開門も建設されました。その後、平成6年、14年に大型船が通行できる新第2、新第1開門へ生まれ変わり、平成17年には尼崎開門集中コントロールセンターも竣工しました。



昔も今も水辺とつながりが深いまちなのね。



\*史料館は、尼崎市立地域研究史料館です。